

---

# 俺の異世界戦記 End of the world

利瀬 時夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の異世界戦記 End of the world

### 【Nコード】

N3651Y

### 【作者名】

利瀬 時夜

### 【あらすじ】

「ようこそ、レジエンディアへ」堅実な道を歩み続けていた、平凡な俺は、突如異世界へと召喚される。まさか過去に望んでいた事が現実になるとは……。神様、有難う。が、俺の思想は、思案は、思考は幼稚過ぎた。世界は甘くは無い。奴隷制度、世俗に塗れた新興宗教、内戦、紛争、戦争、国家滅亡。最低最悪な単語の羅列。それは俺の理想が完膚無きまで破壊された一瞬だった。そして迫られる究極の選択。この世界は終わる。終わらせて溜まるかよ、どれだけ最低最悪な世界でも！ 終わらせて溜まるか！ 世界を駆け巡

り、最期の最後まで舞台上で舞い続ける。これは俺の、主人公達の物語（残酷な描写、表現、卑猥な描写や表現が登場します。苦手な方は即座にバックブライザー。主人公最強の安心と安全の物語、暇潰しにでもどうぞ）

## 序章 究極の選択

正義の味方が、英雄か。

世界を護るか、君を護るか。

もしも世界の終わりに直面したら、どうするのか。

究極の選択を迫られ、思い悩み、行動を躊躇<sup>ためら</sup>う物語の主人公達を目にする度に、少年時代の俺はささやかな空想に浸った物だ。

俺が主人公だったら、どうするのだろうか。

正義の味方として弱い物の為に戦うのも悪くは無いし、英雄として栄誉、名声、そして称えられるのも悪くは無い。

君への想いを貫き、君を護るべきなのか。それとも人類の未来の為に、世界を護るべきなのか。

世界の終わりに直面したら、崩壊する世界を一番高い場所から見守るのも悪くは無い。

勿論、俺はこんなシチュエーションにぶつかる事何て、この物質<sup>マテリア</sup>世界に暮らしている限り有り得ないし、年相応の俺の世界は狭かった。だからこそ、気楽にこの選択肢を楽しめたのだと思う。

それにしても、嗚呼、そんなシチュエーションを一度で良いから味わってみたい。

少年心をくすぐる、そんな甘美な響きを。

まあ、何れにせよ主人公の未来は哀切に満ちた物になるだろう。

しかし、何処か陰のある主人公程格好いい物はない。

俺の幼い頃に読んでいた物語に、セカイ系と呼ばれる設定が組み込まれている物があつた。

主人公の行動、意志が世界の本質、根本、在り方に深く、綿密に関わり、その行動次第で世界の滅亡や、ヒロインの死を誘発する事も在り得る。そんな物語設定をセカイ系と呼んだ。

主人公は人知れずに、人類の為の世界の敵、いや、世界自体と戦うのだ。それがどれだけ格好良い事か。嗚呼、やっぱり格好いい。

次生まれ変わるのなら、異世界にでも生まれ変わりたい物だ。  
出来れば生まれ変わるまで待てないので、今直ぐにでも召喚やら  
転生して貰いたいのだが……。

まあ、無理な事だ。

だから俺は堅実な道を歩んでいる。

そんな無理難題に希望を掛けるのなら、堅実に人生を歩む。それが結論だ。

けれど、それから何年か経ち、そんな幼稚が願望等スツカリ忘れてしまっていた頃、堅実な道を歩んでいた俺は、その究極の選択を迫られる事になった……。

「ようこそ、レジエンディアへ」

これが俺の物語の、始まりだった。

序章 究極の選択（後書き）

感想お待ちしております

第一話 Christmas Fend Away(前書き)

略は『消え去るクリスマス』ですね。

何だか物騒なタイトル。

では、どうぞ！

## 第一話 Christmas Fend Away

そもそもの始まりは、今から2時間前まで遡る。さかのぼ

西暦2025年12月24日。

恋人同士が愛し合い、愛を語り合い、求め合うその日。

彼女の居ない俺は外で同じく彼女の居ない男勢とふらふらしていた。

彼女居ない歴〃人生では無いが、俺の場合は彼女は居たが、直ぐに別れるパターンが多い。

長く続いた物で5ヶ月だろうか、それ以上続いた恋は無い。

俺が熱し易く冷め易い性格なのか、それとも彼女が俺に愛想を尽くしたのか……。

何れにせよ、もっと長く続けてみたい物である。

「んじゃあ俺そろそろ帰るわ」

コンビニで壁に掛けてある時計を確認してから、そう告げると、

他の男勢は「おー、俺達もそろそろ終わりにして帰らないと補導喰らうな」と続けて、同じく立ち上がる。

「じゃあお先に」

「おう、また明日な」

「じゃーなー」

手を振って、コンビニから出れば、冷たい風が俺を包んだ。

「寒みい……」

ブルツと体を震わせてから、何時も通りの帰路に着く。

此処からなら、10分掛からず帰れるだろう。

無言で道を歩み続けていると、不意に頭上から花弁が舞い降りた。

「？」

この時期に桜？　と思い首を傾げて、天を仰げば、それは花卉では無い事を悟る。

「雪か……」

白い、それこそ純白の綿がふわふわと、桜の花弁の如く宙を舞っている。

中々幻想的風景だ　　が、やはり降って来たか、と言う思いもある。

「こりゃあ積もるな……」

結構な勢いで降る雪、それは裏付ければ明日の通路状況や、運行ダイヤ、運行状況にも問題が出て来ると言う事だ。

「まあ、明日はどうせ休みだから関係無いけど」

クククと笑ってから、学生最高、と心の中で叫ぶ。  
就職してしまえば、冬休みは無い。

ある場所もあるが、それでも遊んでは居られない。また別の作業を行わなければならない。仕事が山積みならば、その休みの内に家で解決するのが最善策と成る。

そう考えれば、ホント学生は楽である。

「あー……、明日は夕飯鍋焼きうどんにでもしようかなあ」

ほこほここと、明日の夕飯や、行う事を考えていれば、雪は更に勢いを増す。

「お、オイオイ……、これホント大丈夫かよ？」

流石に心配に成って来た。家に帰ったら両親に電話をして置こう。  
自宅前に着けば、門を開け、鍵を開け、扉を開ける。

何かの冗談でしょうか？

開いた扉を閉めれば、深呼吸する。

待て待て、落ち着け、俺。

まずは表札チェック、よし、俺の家だ。

幻覚だよ、幻覚。そうだそうだ、前にマジックマッシュルーム食



自然界の法則に物理法則を無視してるだろうよ、これ。

……やれやれ。

一体全体何がどうなっているのやら……。

第一話 Christmas Fend Away (後書き)

如何でしたか？

落下でしたね、結論。

では、感想をお待ちしております。

では

## 第二話 歯車（前書き）

今回は主人公の気持ちの問題ですね。

実際読者の皆様だったらどうするでしょうか？

世界を護るか、君を護るか。

世界の終わりを救えるのか。

正義の味方か、英雄か。

それではどうぞ！

## 第二話 齒車

落ち続ける。

漆黒の暗闇を。

唯、唯、落ち続ける。

表と裏、或いは正と負を繋ぐ扉の如し。

既に落ちていているのか、それとも浮いているのか判別が付かない。

何れにせよ、俺は今、闇の中に居る。

流れて行く闇を見詰めて、同時に襲って来る恐怖感。

漆黒の暗闇に一人、縋る物も無ければ、頼る物も無い。

必死に手を振り回し、何か、縋れる物を探す。

しかし、そんな感情も即座に消え去る。

直後、流れて行く闇は引き裂かれる様に純白へと変貌し、俺を吐き出した。

「っ、う……………」

ビビビッ、と足に走る痺れ。

地上より僅か上空から吐き出された俺は、見事に着地した。

「……………、此処は……………？」

足の痺れが緩和してから、俺は周囲を見回した。

地面を彩る色取り取りの花々。

蒼穹の青い空。

そして、その大地を両断するかの様に流れる透き通った透明度の高い川。

「……待て、ちょっと待て」

可笑しい。

第一に此処は何処だ？ 俺は何処に来てしまったんだ？

第二に何故太陽が昇っている？ あの時まで夜だったはずだぞ？

第三にこんな桃源郷みたいな場所、俺の住んでいた場所に有ったか？

「……、夢か」

結論、これは夢だ。

俺はその場に寝転がり、己の腕を枕に眠りに付こうとする。

これが夢なら、寝れば覚めるはずだ。

「夢じゃないのよね、これが」

とうとう幻聴まで……、嗚呼、俺、どうしてしまったのだろうか？

麻薬、駄目、絶対。

俺、麻薬、使ってない、いや、使わない、絶対。

「現実を直視しなさい」

「……はい」

真に、本当に残念極まりない事に、これは現実らしい。

そして俺の目の前には、青い長い髪を持ち、これまた美形な俺と  
同じ年位に見える男性が一人。

「君、名前は？」

「……、ひなのしゅうへい久野秀平」

「そうかそうか、じゃあ秀平君。まずは落ち着いてこの状況を理解して欲しい」

「はい」

案ずるな、俺はもう落ち着いている。  
多分だが……。

「君を此処に呼んだのは誰でも無い。僕だよ」

「はい。で、何でまた俺を？」

既に鼓動は早い。動悸も地味に荒れて来ている。

「それは至って簡単でね、君、主人公に成ってみないかい？」

「……は？」

主人公？ 主人公って、あれか？ あの、物語の主人公か？

其処でドクンッ、と俺の鼓動が一度高鳴る。

「今僕達神は、危機に直面していてね。世界の一つが終わろうとしている。それも、大勢の人々を飲み込んでね。僕達神はそれを放つては置けない。見殺し何て最悪だしね」

世界の終わり。

再びドクンツ、と鼓動が高鳴る。  
遠い昔に、究極の選択を願った。  
願った事の中に、それはあった。  
世界の終わり。

「しかし神様は介入出来ない。神様に出来るのは、世界を創る事と、人類を創る事。政治経済、世界構成は自分達でする事。神様は人類創造以上の事をしてはならない。それが定めなのさ。」

で、僕達神は決定した。僕達の代わりに違う誰かにそれをして貰おうと」

「それ……？」

俺は首を捻った。

「世界の終わりを食い止める事だよ。今、世界は救いを求めている。救いを求め、足掻いている」

再び高鳴る鼓動。

絶好のシチュエーション。

望んでいたシチュエーション。

それが今、目の前に有る。

「世界の終わりを救い、皆を救い出して、世界を改変して欲しい。それを君に頼みたいんだよ、秀平君」

直後、俺の脳内に過去の記憶が蘇った。

英雄か、正義の味方か。

世界を護るか、君を護るか。

世界の終わりを、どう過ごすのか。

過去の想いは俺の記憶を呼び覚まし、次々と感情として芽生えさせる。

「……それは、俺に出来る事なのか？」

しかし、邪魔をするのは今まで堅実に歩んで来た俺の良心。

此处で空想の産物の世界に浸るつもりか？

所詮、空想だぞ？

世界の終わり何て寝て過ごせば良いだろう？

「出来るよ。逆に言わせて貰うけど、君は君自身出来ないと思ってるの？」

「それは……」

出来ない、とは思っていない。

唯、出来るか分からない。正直言って、不安なのだ。

出来なかった時、どうしよう。

出来なかった時、俺はどう責任を取れば良いのだろうか？

「君なら出来るよ。君なら出来る、僕は信じてるよ。それに、僕だって協力する」

「……」

「ねえ、今まで脇役だったんでしょ？ なら、そろそろ主役になる  
「よし」

「……」

俺は、

「行こうよ、一緒に」

俺は、

「主人公」

俺は  
！！

「その世界、終わらせて溜まるかよ」

俺の歯車は動き始める。

錆び付いた、主役としての歯車が今。

潤滑油を指され、今再び稼動する。

これが始まりにして、終わりなのだから。

### 第三話 レジェンディア（前書き）

さてさて、異世界突入開始！

そして今回主人公の能力がチート全快です。  
では、どうぞ！

### 第三話 レジエンディア

「で？ これから俺が行く事に成る世界ってどんな世界な訳？」  
俺は首を捻った。

流石に無知で行きたくは無い。

無論、行つて早々殺されました何て言う笑えない冗談も無しだ。

「ん、説明もするけど、先に有難う。これであの世界は救われる」

微笑んでから頭を下げて来る神様に俺は手を顔の前で横に振つてから「構わないさ。それに俺だつて見殺し何て嫌だしね」と頷いた。

「そう……、ん、じゃあ説明するよ？」

「嗚呼、宜しく頼む」

「まずは君の行く世界。名前は？レジエンディア？。通称『伝説が創られる世界』」

「大層な名前じゃないか。で？」

「うん」神様は頷いてから「この世界、君達の暮らしている日本とは正反対だね」と続けた。

「正反対？」

俺は首を傾げた。

どう言う意味で正反対なのだろうか？

「ん、無秩序、無法、法則無しの世界だよ。だから未だに絶対王政だし、奴隷制度もあるし、宗教だつて世俗に塗れてる。戦争もあれば、紛争もあるし、内戦も至る所で勃発しているのさ」

「つ、詰まり……、あれか、乱世？」

恐る恐る尋ね掛けて見ると、神様は顔を俯かせてから、静かに頷いた。

「な、成程……、そ、それで？」

行くのが怖くなって参りました。

だつて無秩序、無法、法則無しよ？ しかも絶対王政、奴隷制度、戦争、紛争、内戦と来たもんだ。

逆に怖く無いって言う奴を連れて来て見ろって話だよ。

「ん、それでね、その世界は？魔法？が主力で、技術と言う技術は特に無し。あつてもシャンデリアとか、ベッドとか、家具を作る技術だけかな。嗚呼、後兵器とか」

「技術大国日本とはホントに正反対だな、これは」

「法律、技術の意味で正反対だったらしい。」

「でしょ？ それでね、流石に無能力のまま君を送り出すのは可哀想だから、能力を付与しようと思うんだ」

「能力？」

「例えば、以前あの世界に行った人は魔法破壊とか、破壊系統。その次に行った人は創造とかね」

「完全チートだな、オイ」

「魔法破壊って、魔法が主力の世界じゃあ天敵的存在じゃねえか。」

「で、君は何が欲しい？」

首を傾げて尋ねて来る神様に俺は、顎に手を添えて唸った。

「んー……、ブツチギリの能力でも良いし、または創造とかも面白そうだし、んー……」

「じゃあ僕の方で決めちゃうよ？」

「ん、嗚呼、構わない」

チートで無ければ。

「じゃあ……、これかな」

「どれ？」

首を傾げる俺に、神様は満面の笑みで「霸王と英雄」と告げて来た。

「完ッ全チートだよね!？」

「大丈夫、説明書も有るから」

「説明書問題?! てか能力説明書?! 何それ初耳!」

「まあ、ぶつちやけ君は霸王は確定で、騎士か英雄かで迷って英雄にした」

「何で霸王確定？」

俺覇権狙ってないよ？

「風貌？」

「俺何者?!」

風貌で確定されました、嗚呼、理不尽。

「で、まあもう授けちゃったから、後は煮るなり焼くなり好きにしてって」

「今俺を棄てたよね、棄てたよな、棄てましたよねえ!？」

「ん？ 何の事？」

「死ねば良いのに」

深い溜め息を吐いてから「で」と続けた。

「能力もある、世界の説明も聞いた。で、後はどうやって行けば良ければ？」

空路か陸路か海路か。

俺的には陸路が良いのだが……。

「ん？ 暗路」

「何それ……？」

わ、凄い嫌な予感しかしない。

むしろ嫌な予感だけしかしない。

「じゃあ、後で連絡するからね」

「連絡？」

「携帯携帯」

「異世界携帯使ったら何か駄目だろ……」

夢をぶち壊された瞬間でした。

「いや、大丈夫。私としか通話出来ない神様専用携帯だから」

「便利なのか不便なのか……」

微妙な所だ。

非常に微妙な所で。

「じゃあ、行ってらっしゃい」

「嗚呼……、行って来るって、何処から？」

「アディオス」

「はい？」

この感覚は……。

足元に視線を遣れば、此処に来た時同様、足場がジグソーパズルの如く崩れ、壊れる。

そして、

「何で、落とすしか、出来ないんだよおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおお！！！！！！！！」

落ちました。

長い、長い、穴の中を、再び……。

嗚呼、暖かい紅茶が飲みたい……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3651y/>

---

俺の異世界戦記 End of the world

2011年11月10日02時15分発行